

シリーズ 「技あり！ 紙の整理術」

【第1回 机の引き出しを開ければあなたの“整理度”がわかる】

今やデジタル全盛の時代。パソコン・スマートフォン・携帯電話・デジタルカメラなど、様々なデジタル製品が身の回りに溢れています。しかし、これほどデジタル機器が普及しても、私たちの机の上は相変わらず紙の山。一向に紙が減る気配はありません。例えば、企画書や営業報告書は必ずプリンターで印刷して上司や同僚に配布しますし、契約書や見積書など重要な書類はきちんと印刷してから保管します。

恐らく、今後いくら職場のデジタル化が進んでも、身の回りから紙がなくなることはないと思います。その意味でも、書類をきちんと整理することは、いつの時代も変わらない、ビジネスパーソンの基本スキルのひとつと言えるでしょう。そうした観点に立って、紙の整理術のポイントを、印刷から整理、保管、廃棄に至るまで幅広く取り上げていこうと思います。

と言っても、ここで紹介する整理法は、なにも特別なものではありません。誰でも、心がけ次第で簡単に実行できるものばかりです。問題は、その心がけを持続できるかどうかです。このような整理法は、テクニックというより習慣に属するものですから、若いうちに身に付けたほうが良いかもしれません。

でも、実用的な整理術を始めるのに、遅すぎることはありません。若い方はもちろん、机の上に紙が散乱しているベテランの方にも、是非、参考にさせていただいて、紙を整理する習慣を身に付けていただきたいと思います。

今回から数回に分けて、書類のファイリングを取り上げていこうと思います。

必要な書類がすぐに取り出せるようにするには、どうしたらいいのか？ ポイントは「ファイルボックス」の分類にあります。

ここでは、ファイルボックスを使ったファイル整理について解説します。

※ファイルは「ファイルボックス」に立てて置くのが基本

書類を入れたファイルは見出しを付け、ファイルボックスに立てておくのが基本です。積み重ねて置いた時のようにファイルの雪崩が起きることもありませんし、出し入れが簡単で探しやすくなります。

ファイルボックスは、「未処理」「一時保管」「保管」の三つの分類が必要です。机上に置けない場合は、デスクの下段引き出しにファイルボックスを4、5個入れ、ファイリングが機能するようにしましょう。

例えば、下段引き出しにファイルが5個入るのなら、「未処理」と「一時保管」が1個、「保管」が3個といったようにどの種類のファイルが多いのかによって、それぞれのファイルボックスの個数を決めます。

この3つの分類で、仕事の進行に従ってファイルを移動させれば、必要な書類がすぐに探せるようになります。

今回は、【作業効率をアップさせる「縦型ファイルボックス」の使い方】について解説します。

スギウラ株式会社

〒370-0006
高崎市問屋町 2-2-8

電話番号
代 表
027-361-5808
営業1課
027-361-5734
営業2課
027-361-5780

Fax
027-361-1272

当社 Web サイト
www.kamisugiura.co.jp

お気付きの点や質問、疑問などありましたら、ご遠慮なく営業または、下記までお問合せください。

お問合せ
メールアドレス
sg-arai-yoshio
@kamisugiura.co.jp

ニュースレターQ

天保8年（1837年）創業

スギウラ株式会社 027-361-5808

2011年6月1日 発行 第 47号

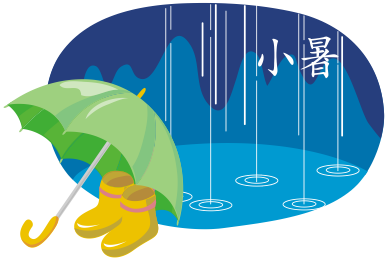
特 集 ・ シタラフェア 2011

・ 地震雲

・ 緑のカーテン

・ 技あり！紙の整理術

シタラフェア2011



6月になりました。街で見かける学生たちも夏服になり、いよいよ季節は夏本番へと向かっていきます。今年は地震の影響で電力不足が懸念されますが、今まで以上の節電を心がけ、早めのクールビズ導入などの工夫で、なんとか冷房も必要最低限で済ませたいですね。昨夏は記録的な猛暑でしたので、あのレベルまで暑くならないことを祈るばかりです。

さて、去る5月13～14日に毎年恒例の設楽印刷機材㈱によるシタラフェアが開催されました。地震により様々なイベントが中止になるなかで、無事予定通り開かれて良かったと思います。

会場に入って正面のメインステージ、今年もリョービ㈱の機械でした。RYOBI 924LED-UV が、そこにはありました。名前の「UV」が表すとおり、UV 乾燥機構を備えた印刷機です。紫外線により一瞬でインキを硬化させ、乾燥時間を大幅に短縮させたのが UV 機の特長ですが、約 800 度という高温になってしまうのが難点でした。しかしこの機械は専用インキを LED による紫外線で乾燥させるので高温にならず、UV 機の欠点が解消されました。すぐ次の作業に移れるのも大きいですが、熱により紙が伸びて見

当ズレが起きてしまう危惧も無くなりました。

この機械をはじめ、今年は UV ニス関連の出品が多かった気がします。冊子や本のカバー等で、ニスが盛り上がった仕上げになっているものをご覧になったことがあると思いますが、あれが UV ニス加工です。一部だけ盛り上げたり、表面をザラザラに仕上げることで、視覚・触覚にアピールするものですが、それがより小型・簡便な機械で出来るようになってきているようです。

本や印刷物は、勿論中身の出来が一番重要ですが、仕上がりの豪華さ・独創性、そしてまず手に取ってもらうためにも、そういった後加工の一工夫が必要になりつつあるのだと思います。

ほかに目を引いたのが、会場中央あたりに出展されていた理想科学工業㈱の「ゴッコプロ 100」です。理想科学工業といえば「リソグラフ」のほかに「プリントゴッコ」。ご存知プリントゴッコは 1977～2008 年まで販売されていた簡易印刷機で、一時は年賀状印刷の定番として主に家庭で大活躍した機械です。

プリントゴッコはインクが原稿フィルムの細かい穴から染み出る「孔版印刷」で、シルクスクリーンを簡単に出来るようにしたものです。原稿を、カーボンを含む専用筆記具で作成し、専用フィルムに密着させてフラッシュランプの熱で熱転写します。感応したカーボン部分だけが透過性を持ったスクリーンとなり、その部分に（裏へ続く）

営業1課

チューブ式インクを盛って用紙に押し当てることにより印刷されます。

つまりこれ1台で製版と印刷が可能、というものでした。時代が下るにつれグレードアップしていき、専用フォトスクリーンで網点再現を実現したり、単色専用だったのが3原色分解により擬似分版カラー印刷できるようになりました。しかしパソコンとプリンタの急速な機能向上と普及によりその活躍の場は無くなってしまい、現在製造は中止されています。

そんなパソコンの普及に対して、実は小型スキャナ、メモリーカードリーダー、インクジェットプリンタ、液晶画面を内蔵した「プリントゴッコjet」も2003年に発売されています。しかしながら、元祖プリントゴッコの特長のひとつである専用インクが使えなかったこと、スキャナ内臓I Jプリンタが珍しくなくなったことなどが災いし、残念ながら元祖のように大ヒット、とはいかなかったようです。

今回出展されたこの「ゴッコプロ 100」は、ものすごく簡単に言ってしまえばプリントゴッコのプロ仕様版です。元祖のように印刷までは出来ないスクリーン製版機ですが、パソコンで

データを作成し製版ボタンを押すと、A/3くらいの版なら約2分で出来てしまう高速製版機です。ダイレクトに製版されるので、版の作成にかかる様々な手間・行程が大幅にカットされます。

会場では実際に作られた版で、Tシャツにスクリーン印刷体験が出来ました。印刷部分は手作業だったのでやってみましたが、とても簡単に綺麗に刷れました。版が良かったからだと思います。因みにTシャツの代金は基本的にこちらで決めて良く、収益は東日本大震災への義捐金に充てられるということでした。

ほか会場にはおなじみ断裁機、折機、梱包機、湿し水濾過機、ラミネートプリンタなど、様々に展示されていました。金曜日の日中にお邪魔してみましたが、来場者の入りも上々だと思われ、賑わっていました。

3月11日以来、どこに行っても何を見ても地震の影響が感じられますが、シタラフェアでは出展側も来場者側も元気で、なかなか印刷業界のパワーを感じさせる、良いイベントだったと思います。

地震雲

今回のような大地震が起こると、一部で必ず話題になるのがコレです。「大地震の前に普段とは異なる形の雲が現れた」というのは昔から世界中で報告されており、今回も例外ではありませんでした。

誰でも手軽に観察できる雲が対象なので、一般市民の研究報告も多くあります。

しかし手軽に観察できるとはいえ、全天が雲に覆われていると駄目、夜は観察しにくいなどの欠点があります。

何より、科学的な証明が全くと言って良いほどされていません。一般的に地震雲とされる雲の特徴としては ・比較的低い高度に発生する ・長時間変形せず消えない ・風に流されにくい、などがありますが、どれも決め手に欠ける上、地震の前に必ず現れるかというところでもなく、再現性も大いに疑問です。

そのため、公的機関や学術団体は総じて否定的な立場を取っています。気象庁は「無いと言

営業2課

今年も6月に入り、一年の半分が終わろうとしています。群馬でも5月20日に、気温30度を超え真夏日となりました。昨年より2週間遅い“初”真夏日だそうです。ここでは、「緑のカーテン」について少しふれたいと思います。

緑のカーテンとは、植物を建築物の外側に生育させることにより、建築物の温度上昇抑制を図る、省エネルギー手法、またはそのために設置される、生きた植物を主体とした構造物を指します。

環境技術としては、壁面緑化にあたるもので、「緑のカーテン」という呼称は、主に個人や市民ベースの省エネルギー運動の範囲での比較的小規模な構造物を指すことが多く、また、大規模な壁面緑化には、外壁に直接植栽する手法などもあります。「緑のカーテン」と言った場合には、主につる植物などを、窓を覆うように繁茂させたカーテン状の構造物を指します。

歴史

歴史的には、遮光・目隠しの効果を有するものが古くから用いられてきました。日本では、夏の風物詩でもある‘すだれ’、店舗や家庭で使われる暖簾といったものがあり、外国でもカーテン・ブラインド等が存在します。特にブラインドについては、エジプトの初期王朝から使われていました。しかし、これらはすだれを除き室内に用いられることが一般的であり、素材は加工品かつ無生物であるため、日光が当たり続けると熱を持ち、熱放射が起こるという欠点があります。こうした欠点を補う方法として、外断熱であり、生きた植物体を使用することにより気化熱による継続的な温度抑制が期待できる緑のカーテンが利用されます。家庭をはじめ学校・企業・公的機関でも用いられています。

概要

夏季高温時において、太陽光の遮断と断熱、および植物葉面からの蒸散による気化熱を利用して、建築物の温度上昇を抑えることを主な目的としますが、居住環境整備としての遮光や目隠し、植物の鑑賞も目的の内です。また、地球温暖化対策の一環として、植物の生体活動による大気中の二酸化炭素の減少を期待する向きもあります。

太陽光が建築物内部に入射することを抑えるため、窓を覆うように設置されるのが基本です。

建物全体を覆えば外壁の蓄熱を防止したり、日射による急激な温度変化や酸性雨、紫外線がもたらす外壁の劣化予防にも繋がります。

植物は主につる植物が用いられ、支柱に絡ませたり外壁やネットに這わせたりして栽培します。秋には葉を落とす落葉性の植物が用いられることが多いようです。常緑性の植物も利用できますが、その場合は冬季も遮光効果を発揮してしまうという難点があります。遮光の目的から、葉がよく茂り高く這い登るツタやキズタなどの植物が多く選ばれますが、家庭や学校では、鑑賞や生育観察、収穫等の目的を兼ねて、朝顔やキュウリ、トマトなども使われます。最近では、比較的病害虫に強く栄養価も高いことなどからゴーヤーも用いられています。

注意点

- ① 支柱や外壁の強度が不足していると、途中で折れたり破損する場合があります。また台風などがもたらす強風によって飛ばされ周囲に被害を及ぼすことがあります
- ② 生育期間中は昆虫が多く集まることもあり、マンション等では近隣の迷惑になる場合があります。また、やむを得ず農薬を使用しなければならない際にも同様です。、
- ③ エアコンの室外機周辺に設置した場合、熱交換効率の低下や火災の原因になる場合があります。逆にカーテンを構成する植物の生育が悪くなったりすることがあります。
- ④ 建物の壁面に直接植物を這わせた場合、壁面が保持する水分量や水の滞留時間が増すため、雨水の水質によっては壁などの劣化が促進されます。
- ⑤ 植物の根は根酸と呼ばれる有機酸を分泌し、土壌や岩などの風化を促進する場合があります。この風化や水による劣化もあり、コンクリート・モルタル・煉瓦・ブロックなどの壁や塀に根が張るのを避けた方が良いでしょう。また根には菌類が付着しやすく、これが付近の水分のpHを低下させる事があります。